茅ヶ崎同盟教会月報　－2017年３月号－

あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。
（ピリピ人への手紙１章６節）

253-0054　茅ヶ崎市東海岸南2-11-17　Tel&Fax.0467-82-3076
https://project01-1470323016877.appspot.com/
（「茅ヶ崎同盟教会」で検索できます）

「ベテスダでのいやし」　ヨハネの福音書５章１～９節

川島正子

イエス様はユダヤ人の祭りの時、エルサレムに上られた。ユダヤには過越の祭り、７週の祭り、仮庵の祭りの３大祭りがあった。ユダヤの男子は年３回この祭りのためにエルサレムに上るよう律法で決められていた。イエス様はこの日、神殿の中ではなく神殿の北にあるベテスダの池に行かれた。新改訳聖書では３節後半と４節が脚注に出ていて次のようにある。「彼らは水の動くのを待っていた。」４節「主の使いが時々この池に降りて来て、水を動かすのであるが、水が動かされたあとで最初にはいったものはどのような病気にかかっている者でも癒されたからである。」この水の下に地下水が流れていて時々流れが池の水を攪乱した。それを天使が水を動かすと信じられていた。

イエス様はそこで３８年間病気にかかって伏せっている人を見て、それがもう長い間の事なのを知って、「よくなりたいか。」と聞かれた。彼は「水がかき回されてもだれも自分を池に入れてくれる人はいない。行きかけると、もうほかの人が行ってしまう。」と答えた。「はい、よくなりたいです」ではなく、誰も自分を助けてくれないからずっと病気も直らないと言わんばかりであった。しかしイエス様は彼に「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」と言われた。彼の心の中のつらさ、誰からも顧みられない深い悲しみをイエス様は知ってくださった。嵐を静め、死人を生き返らせたイエス様の言葉が彼に向かって発せられた。すると彼は床を取り上げて歩き出した。その日は安息日であった。この人に会ったユダヤ人たちは安息日ゆえに床を取り上げてはいけないと言うと、彼は私を直してくれた人が歩けと言ったからと責任逃れをしようとした。イエス様は宮で彼と会いもう罪を犯さないようにと言われた。彼の病が罪の結果であったと解釈されることが多いがむしろこれから罪を犯さないようと言われたのではないか。それなのに彼は自分を直してくれたのはイエスであるとユダヤ人に知らせた。このことを高橋三郎師は「イエスの恵みに浴した者の手が、イエスを危険の中に投げ出した」と記している。この時からイエス様に対するユダヤ人の迫害が始まった。彼はイエス様を救い主と告白はできずに立ち去った。

救われる前の私たちはベテスダの池のまわりで横になっていたこの男性のようだったのではないだろうか。生きている意味も分からず虚しさと死への不安をかかえて水の面を見ていた。そんな私たちにイエス様は床を取り上げて歩けと言われ、生きる希望といのちを与えてくださった。取り上げた私たちの床は軽くはない、むしろ重荷かもしれない。しかし私たちの主はそれを共に負ってくださる方である。主とともに歩み、恵みに感謝する毎日を過ごせますように。